

◆荒井良明 選

《ユーモアと皮肉》

先人は必至に春を惜しみけり 相生垣 瓜人

一読して、なんとも可笑しい。春を惜しまないと俳人の資格に欠けると思っ
ているがごとく、「春を惜しまねば」という脅迫観念に駆られるがごとく、俳人
は誰もが春を惜しむ句を作る。掲句は、そのことを皮肉まじりのユーモアで指
摘している。

白髪同士春ををしむもばからしや 小林一茶

春惜しむ人にしきりに訪はれけり 夏目漱石

一茶も漱石も瓜人と同じように感じたのだろうか。

《写生句で驚きを》

遠足の列大丸の中とほる 田川飛旅子

「遠足の列」ときたら、「遠足の列は余さず森に入る（能村研三）」とか、「遠
足の列地下道に吸ひ込まれる（藤田寿子）」とかを思い描くが、掲句では「大丸（デ
パート）の中とほる（通る）」という予想外の展開。そうきたか！ なんだか滑
稽な景である。子らの顔、引率教師の表情、店員達や居合わせた一般客の様子
…、色々と想像させられる。

「現実に十分有り得ることでありながら、清新な驚きに満ちた世界が展ける。
『写生』という伝統的な俳句の特性が生かされた手法である」（今井聖）。

駅なのかデパートなのか夏兆す 田中ひろし

《あの又吉直樹の一句》

おでん屋のがんもどき似の主人かな 又吉直樹

おでん屋の主人が「がんもどき」に似ている。私の小学校時代のあだ名は「が
んちゃん」。丸顔で「がんもどき似」だったから。そんなこともあり、私の中
では滑稽味が増した一句。

《殺生を許されぬはずの僧の身で…》

方丈のあらうことかや 河豚^{ふぐ} 中^{あた}り 小松^{げっしやう} 月 尚
臂^{ひじ}の蚊を成仏せよと打ちにけり 同右

小松月尚は、浄土真宗の寺の住職。寺の住職（方丈）が、あらうことか（こんなことがあってよいものか、いやとんでもないことだ）生臭物（なまぐさもの：魚類や鳥獣類の肉など）を食してはならぬのに、河豚を食べて中毒したという滑稽なお話。

殺生を許されぬ僧が、蚊を殺す。「成仏せよ」と言い訳しながら。シニカルな滑稽句。

《「ばったんこ」って何？》

ばったんこ何を 威^{おど}すとなけれども 瀧^{たき} 春^{しゅんいち}一

「ばったんこ」は、『広辞苑・第七版』にも『大辞林・第三版』にも載っていない。角川大歳時記や合本俳句歳時記には「添水（そうず）」の傍題として載せてあるから、俳句の世界以外では使われない言葉なのかも。

添水とは、「竹筒に水を引き入れ、たまる水の重みで反転した竹筒が石などに当たって快い音を立てるようにした装置。庭園などに設けるが、もとは田畑を荒らす鳥獣を追うもの。ししおどし。（広辞苑・第七版）」。元々は「田畑を荒らす鳥獣を追う」目的を持っていたものが、庭園などに「かざり（?）」として設けられるようになったらしい。何を威すとなくバツタンコと音を立てる。風流といえば風流、滑稽といえば滑稽。

《三輪山（男神）にうそぶかせた滑稽（諧謔）》

即興に生まれて以来三輪山よ 和田悟朗

和田悟朗は、大阪大学理学部卒業。神戸大学や奈良女子大学で教鞭を執っていた。科学者ゆえか、堀本吟によれば、「『地球』『宇宙』『時間』『光束』など、観念操作のいる用語は悟朗の独壇場ともいえる目新しい使い方だった」。

言われてみれば、山も川も海も、森羅万象すべて「即興に生まれて」きたのだ。掲句では歴史的に由緒ある三輪山の幹旋がうまい。三輪山伝説では三輪山は男神だから(?)、掲句も男口調。

台風や地球の水を繰り返し 和田悟朗
大地球小地球など柘榴裂け 同

《時を超えて響きあう二句》

行く人の霞になつてしまひけり 正岡子規
それとなく霞む練習してゐたり 糸大八

この二句を並べると、なんとも可笑しい。「行く人の霞になつてしま」った理由は？ それは、「それとなく霞む練習してゐた」からよ。こんな読み方は邪道かもしれないが、この二句は時を超えて響きあっている。両句ともに、単独でも諧謔味がある。

《しるく、シルク、著く》

絹の薔薇作りてしるく夏瘦せず 寺井谷子

「自鳴鐘」主宰の寺井谷子が、こんなおちゃめな句を！ 歳時記に掲句を見い出してびっくりした。「しるく」とは、「著し(しるし)」(いちじるしい)の連用形。これと、「シルク(絹)」との連想上の押韻。地口(駄じゃれ)を含んだオシャレな一句。